

第110回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 平成28年7月20日(水) 15:00~17:00
- 2 場所 関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

- ・近藤 誠司 社会安全学部准教授

発表テーマ「みんなが備える、みんなで支える ―防災情報学の新機軸―」

- ・松田 敏 環境都市工学部教授

発表テーマ「地震動の統計的性質と不規則性を踏まえた建築構造物の耐震設計法」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

① 学長選挙会の結果について

資料1

② 名誉博士称号の贈呈について

資料2

③ 国際文化交流「豊臣期大坂図屏風」コンサートの開催について

資料3

④ 社会連携部の取り組みについて

資料4

⑤ 関西大学カイザーズ総合型地域スポーツ・文化クラブ

(通称: 関西大学カイザーズクラブ) の活動について

資料5

⑥ 関西大学フェスティバル in 四国の開催について

資料6

⑦ 平成28年度地方教育懇談会の開催について

資料7

⑧ 関大生の活躍について

資料8

⑨ リクルート社「進学ブランド力調査2016」の結果について

資料9

⑩ 梅田キャンパス開設に伴う株式会社TSUTAYA との

共同記者発表の開催について

資料10

4 大学側出席者

楠見晴重学長、西村枝美学長補佐、

近藤誠司社会安全学部准教授、松田敏環境都市工学部教授、

松浦雅彦関西大学カイザーズ総合型地域スポーツ・文化クラブ事務局長、

立仙和彦総合企画室次長、依藤康正広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

(1) 関西大学通信 第451号、第452号

(2) 関西大学ニューズレター「Reed」No. 45

(3) 関西大学公開講座「真言密教の聖地 高野山の歴史と文化」チラシ

(4) 行事予定表(7月~9月)

以上

【次回(第111回)記者懇談会開催予定】

日時: 平成28年9月14日(水) 15:00~17:00

場所: 千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室

みんなが備える、みんなで支える

—防災情報学の新機軸—

社会安全学部准教授 近藤誠司

【概要】 防災情報を与えれば与えるほど、ダメになる？

阪神・淡路大震災から21年。東日本大震災から5年。熊本地震から3か月。わたしたちは、あの痛ましい災害の教訓をきちんと汲み取ることができているのでしょうか。

…と、このように“生真面目”に話を立ち上げると、内心、「またか」と舌を打ちたくなる人が増えているのではないのでしょうか。防災・減災は、確かに大事な 이슈 です。でも、そんなことは、言われなくとも、みんな（うすうす）わかっている。“最悪の被害想定”などを膨大な数値データで見せつけられると、もう、うんざり。中には諦めてしまう人が出てくる始末。今までの取り組みが徒労だったと思ひ悩み、反発を抱く人もいる。孤軍奮闘する“生真面目”な地域リーダーの中には、「防災訓練に来なかった人は、災害時に死んだってしかたない」とまで思い詰めてしまう人もいます。これって、健全なのでしょうか。

防災・減災・強靱化・レジリエンス等々のドライブが、「社会的分断」を引き起こしています。ある意味で、「災害大国・日本」特有の社会的な閉塞状況といえます。防災の情報が——それ自体は正しかったり善意のもとで提供されたものであったりしたとしても——、ネガティブ・スパイラルを生み出している現実…。以上が、きょうお話しするテーマ、「防災情報の新機軸」の背景にある問題意識です。

じゃあ、どうすれば、よいのでしょうか。人間科学の地平からアクション・リサーチのアプローチを重視している近藤研究室の取り組み事例の中から、(限られた時間ですが)“処方箋”を探っていきたいと思います。キーワードは、「リアリティ」と「ローカリティ」です。

なお、当該の問題に“特効薬”があるわけではありませんので、さいごに、きつともやもやしたものが残ると思います。その際には、ぜひ、あらためてお声かけください。

【プロフィール】

1972年、愛知県名古屋市生まれ。関西大学社会安全学部・准教授。

1994年、京都大学法学部卒業。1994年から2014年まで、NHKで報道部ディレクターとして従事。NHKスペシャル「メガクエイク 巨大地震」で、科学技術映像祭・内閣総理大臣賞受賞。中国四川大地震の現地取材でNHK会長特賞を授業。現在、人と防災未来センター・リサーチフェロー。京都大学防災研究所巨大災害研究センター・非常勤講師。徳島大学大学院先端技術科学教育学部・非常勤講師。神戸学院大学現代社会学部学際教育機構・非常勤講師。著書に『ワードマップ 防災・減災の人間科学 ——いのちを支える・現場に寄り添う』（新曜社）、『現場で作る減災学 共同実践の五つのフロンティア』（新曜社）など。

2015年度、ぼうさい甲子園「教科アイデア賞」、防災ラジオドラマコンテスト最優秀賞。ラジオ大阪(OBC)「サタオビ」で毎週土曜日、防災のコーナーを学生と共同企画・放送中。

地震動の統計的性質と不規則性を踏まえた建築構造物の耐震設計法

環境都市工学部建築学科 松田敏

【概要】

日本は世界有数の「地震国」であり、これまでに多くの地震とそれによる被害を経験している。日本列島およびその周辺で発生する地震は、海溝型地震と内陸活断層型地震に大別される。地球の表面を覆う「プレート」が、地球内部のマントル対流に引きずられ、日本列島が乗る陸側のプレートの下に海側のプレートがもぐり込む境界面で発生するのが海溝型地震であり、北米プレートの下に太平洋プレートがもぐり込む日本海溝、およびユーラシアプレートの下にフィリピン海プレートがもぐり込む南海トラフでは、繰り返し巨大地震が発生している。一方、このようなプレートのもぐり込みに付随して陸側のプレート内部で、我々の足元の活断層周辺に蓄積されたひずみが一気に解放される際に発生するのが内陸活断層型地震である。この2つの型の地震は、繰り返しの周期や、規模、発生位置（震源距離）の違いにより、互いに異なった性質を持っている。海溝型地震である2011年東北地方太平洋沖地震と、内陸活断層型地震である2016年熊本地震の地震動の性質を比較し、特に、建築構造物に対する影響の違い、被害との関係について考察する。

1995年兵庫県南部地震以降、地震に関する研究が政策として推進され、活断層調査や稠密な地震観測網の整備によって我々の地震に対する知識・理解は飛躍的に向上している。しかし、地震動は、断層破壊というその発生過程に起因する本質的で不可避な不規則性・非再現性を有しており、将来の地震動を完全に予測することは不可能である。そこで、このような地震動の不規則性・非再現性を踏まえつつ、多くの地震観測・研究により蓄積された地震動の統計的性質を包絡し得る「確率過程」として入力地震動モデルの表現と、それに基づく建築構造物の耐震設計法を紹介する。特に、近年注目されている、振動特性の異なる2つの建物をダンパーで連結し双方の揺れを抑制する「連結制振」への適用を提案し、その概要を解説する。

【プロフィール】

1966年島根県生まれ。関西大学環境都市工学部建築学科教授。京都大学工学部建築学第2学科卒業、同大学院工学研究科博士後期課程単位修得退学。博士（工学）。2016年4月より現職。専門は耐震工学。主として、コンピュータ・シミュレーションと確率統計的アプローチによる設計用入力地震動モデルの作成、建築構造物の耐震性能評価、および最適設計法に関する研究に取り組んでいる。